

序

この本を読んだ後にできるようになること、それは、

- ① 腹痛患者に対して最低限の診断と治療ができるようになること（腹痛患者を単に対症療法で帰宅させることではない！）
- ② 診断不明の腹痛患者を外来でフォローするか入院させることができるようになること
- ③ 確定診断がついた腹痛患者に対して適切な専門医に適切なタイミングでコンサルテーションできるようになることです。

この本は上記のように非常に初歩的なレベルを目標としています。したがって、この本の内容は各科専門医の先生方にとってはとても物足りない内容だと思います。しかし、実際プライマリ・ケア医として私が知っていること、および、実践していることはこの程度のことしかないので、研修医の先生方は初期研修2年間の間にこれだけ身につけてもらえれば上出来です。

本書の内容は紙面の関係で抽象的な原則論が中心になってしまいました。実際の個々の症例検討については、別冊ERマガジン（CBR）に連載中の「済生会福岡総合病院臨床教育部カンファレンス・レポート」をご覧ください。

上記の目的が達せられるだけでなく、この本を読んで今まで敬遠していた腹痛患者を、次は一体どんな患者なのかとワクワクしながら診療できるようになってもらえれば幸いです。

2009年6月

田中和豊